

# 成人看護学実習における看護対象の実態調査

## Survey on actual situation of patients in adult nursing practical training

坂本 弘子<sup>1)</sup> 市川裕美子<sup>2)</sup> 佐藤真由美<sup>1)</sup>  
小笠原陽子<sup>1)</sup> 木村 紀美<sup>2)</sup>

**要約** 成人看護学実習は、成人期にある対象者の看護を臨地で体験を通して学ぶことを目的としている。現在の人口構成の変化や医療を取り巻く環境の変化は、成人看護学教育の目標を達成できにくいのではないかと考え、成人看護学実習における看護対象の実態調査を行った。平成28年度と平成29年度の成人看護学実習における看護対象は、70歳以上の患者が最も多く70歳未満の患者を受け持った学生は半数以下であった。また、約2割の学生が実習期間中に2人以上の患者を受け持ち、手術の見学は約6割の学生が体験できていた。今後の成人看護学実習では、これまで以上に施設と調整を行い加齢に伴う変化に加えて個別性を強く意識させる必要があり、患者年齢のみのとらわれずに指導をしていく必要がある。

**キーワード**：成人看護学実習、対象者、年齢、疾患、学生

## I. はじめに

成人期は生活を営むなかで、社会との相互作用を絶えず続け、さまざまな出来事を経験し、経験を積み重ねながら、意思決定し、行動し、自分らしく生きている人間のライフサイクルの中で身体的、精神的に安定し社会・経済的に大きな役割と責任を負っている年代

である。しかし、心身ともに充実した時を持つことができる年代である一方で、過度の外部刺激が内部環境に影響し、健康を害し何らかの問題を抱えて生活している人が多いと考えられる。本学の成人看護学実習は、このような成人期の対象者を受け持つことによ

---

1) 八戸学院大学短期大学部 看護学科

2) 八戸学院大学 看護学科

て、対象を理解し、健康問題および健康問題に対する予防や解決に向けての看護を臨床現場で学習することを目的にしている。成人看護学実習Ⅰは、急性期・回復期・周手術期とし、成人看護学実習Ⅱは慢性期・終末期を対象に、3年次に延べ6週間実施されている。文部科学省（平成24年）においては、成人看護学教育の目標を、成人の身体的・精神的・社会的特徴、生活、保健及び疾患についての理解に基づき、その看護に関する知識と技術を習得させるとともに、看護を行うための基本的な能力と態度を育てることであると述べている。

現在の我が国の人口構成は、平均寿命の伸長、少子高齢化により「つば型」を示している。総務局統計局「国勢調査報告（平成27年）」によると、成人期である生産年齢（15～64歳）人口は60.6%と減少傾向にあり、年齢3区分別人口割合をみると、年少人口と生産年齢人

口で低下が続く一方、老年人口は上昇が続いている。また、医学的進歩も目覚ましく、医療の高度化により、入院期間は大幅に短縮され、さらに、医療費削減のため、外来での治療継続が推奨されている。このような人口構成の変化や医療を取り巻く環境の変化は、成人看護学実習の対象である成人期の患者を選択しての実習は困難となっており、成人看護学教育の目標である成人の身体的・精神的・社会的特徴を理解しにくい実習環境にあるのではないかと考えた。そこで、本学の成人看護学実習において、実際に成人期の患者を受け持ち実習できているのか、また、実習3週間の中で何人の対象者を受け持ったのか実態調査を行った。このことから、成人看護学実習の目的・目標達成にはどのような課題があるかを明確にし、今後の対策、指導、教育について示唆を得ることを目的とした。

## II. 研究目的

成人看護学実習における看護対象の実態について検討する。  
を把握し、成人看護学実習の課題と対応策に

## III. 研究方法

### 1. 調査期間

平成28年5月から平成29年10月であった。

### 2. 調査対象

1) 平成28年度成人看護実習Ⅰを行った学生63名

2) 平成28年度成人看護実習Ⅱを行った学生62名

3) 平成29年度成人看護実習Ⅰを行った学生83名

4) 平成29年度成人看護実習Ⅱを行った学生82名

### 3. 調査内容

平成 28 年度および平成 29 年度に成人看護学実習Ⅰ・Ⅱで受け持った患者の性別・年代・疾患名・手術見学の有無・実習期間中に受け持った患者の数

### 4. 倫理的配慮

データには受け持ち患者の氏名を伏せ、学生にはナンバリングを行い集計することで、学生個人が特定されることは無い。また、データは成人看護学実習の成績評価の終了後に集

計し、研究結果が学生の実習成績評価に影響することは無い。さらに、データ処理はインターネットに接続されていないパソコンで実施し、入力されたデータはパソコン本体ではなく外づけのメモリ媒体で管理した。媒体そのものは鍵のかかった引き出しに保管し、研究終了後はデータを速やかに破棄することとした。本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

## IV. 結 果

### 1. 受け持ち患者延べ数と性別

1) 平成 28 年度の成人看護学実習Ⅰは、学生 63 名に対し、受け持ち患者延べ数 77 名、うち男性患者 30 名、女性患者 47 名であった。成人看護学実習Ⅱは学生 62 名に対し、受け持ち患者延べ数は 78 名で、うち男性患者 31 名、女性患者 47 名であった。

2) 平成 29 年度の成人看護学実習Ⅰは学生 83 名に対し、受け持ち患者延べ数 106 名で、うち男性患者 52 名、女性患者 54 名であった。成人看護学実習Ⅱは学生 82 名に対し、受け持ち患者延べ数 106 名で、男性患者 50 名、

女性患者 56 名であった（図 1）。

### 2. 受け持ち患者の年代

1) 平成 28 年度成人看護学実習Ⅰでは、90 歳代 1 名、80 歳代 11 名、70 歳代 27 名で、70 歳以上の患者は計 39 名（50.6%）であり、60 歳代 23 名、50 歳代 8 名、40 歳代 3 名、30 歳代 1 名、10 歳代 3 名で、70 歳未満の患者は計 38 名（49.4%）であった。100 歳代、20 歳代は 0 名であった。70 歳未満の患者を受け持ち実習できた学生は、49.4%であり、半数以上の学生が 70 歳以上の患者を受け持ち実習していた。

2) 平成 29 年度成人看護学実習Ⅰでは、90 歳代 5 名、80 歳代 25 名、70 歳代 27 名で、70 歳以上の患者は計 57 名（53.8%）であり、60 歳代 22 名、50 歳代 16 名、40 歳代 5 名、30 歳代 6 名、70 歳未満の患者は計 49 名（46.2%）であった。100 歳代、20 歳代、10 歳代は 0 名であった。70 歳未満の患者を受

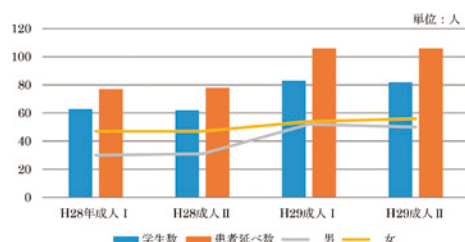


図 1 学生数と受け持ち患者延べ数と患者の性別

け持ち実習できた学生は、46.2%で半数以上の学生が70歳以上の患者を受け持ち実習していた(図2)。

3) 平成28年度成人看護学実習Ⅱでは、90歳代9名、80歳代27名、70歳代24名で、70歳以上の患者は計60名(76.9%)であり、60歳代13名、50歳代4名、40歳代1名、70歳未満の患者は計18名(23.1%)であった。100歳代、30歳代、20歳代、10歳代は0名であった。70歳未満の患者を受け持ち実習できた学生は、23.1%で学生の4人に1人の割合で、ほとんどの学生は、70歳以上の患者での実習であった。

4) 平成29年度成人看護学実習Ⅱでは100歳代1名、90歳10名、80歳代26名、70歳代35名で、70歳以上の患者は計72名(67.9%)であり、60歳代20名、50歳代12名、30歳代2名、70歳未満の患者は計34名(32.1%)であった。40歳代、20歳代、10歳

代は0名であった。70歳未満の患者を受け持ち実習できた学生は32.1%で、7割の学生が70歳以上の患者を受け持ち実習していた(図3)。

### 3. 受け持ち患者の主な疾患名

1) 平成28年度成人看護学実習Ⅰでは、悪性新生物28件(36.4%)、筋・骨格系28件(36.4%)、脳神経系10件(12.9%)であった。

2) 平成29年度成人看護学実習Ⅰでは、筋・骨格系46件(43.4%)、悪性新生物22件(20.8%)、脳神経系22件(20.8%)、消化器系14件(13.2%)であった(図4)。

3) 平成28年度成人看護学実習Ⅱでは、循環器系23件(29.5%)、脳神経系14件(17.9%)、悪性新生物13件(16.7%)であった。

4) 平成29年度成人看護学実習Ⅱでは、脳神経系22件(20.7%)、悪性新生物19件(17.9%)、循環器系16件(15.1%)であった(図

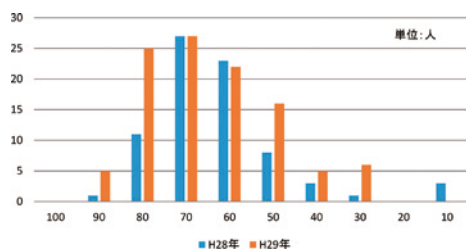


図2 成人看護学実習Ⅰ受け持ち患者の年代

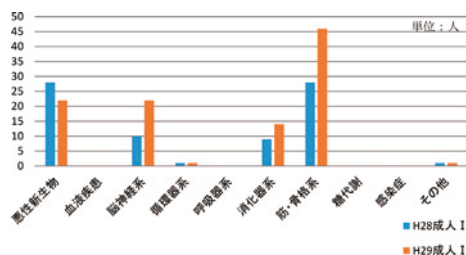


図4 成人看護学実習Ⅰの主な疾患

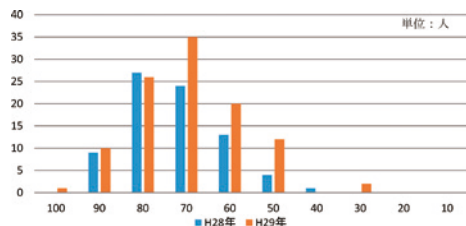


図3 成人看護学実習Ⅱ受け持ち患者の年代

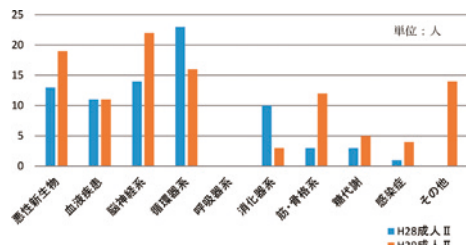


図5 成人看護学実習Ⅱの主な疾患

5)。

#### 4. 手術の見学の有無

1) 平成 28 年度手術見学を体験できた学生は、36 名（57.1%）であった。

2) 平成 29 年度手術見学を体験できた学生は、50 名（60.2%）であった。

#### 5. 実習期間中に 1 人の学生が受け持った患者の数

1) 平成 28 年度成人看護学実習 I において、1 名の患者を 3 週間通して受け持った学生は 49 名（77.8%）で、2 人の患者を受け持った学生は 14 名（22.2%）であった。

2) 平成 28 年度成人看護学実習 II において 1 名の患者を 3 週間通して受け持った学生は 45 名（72.6%）、2 人の患者を受け持った学生は 17 名（27.4%）であった。

3) 平成 29 年度成人看護学実習 I において 1 名の患者を 3 週間通して受け持った学生は 60 名（72.3%）、2 人の患者を受け持った学生は 23 名（27.7%）であった。

4) 平成 29 年度成人看護学実習 II において、1 名の患者を 3 週間通して受け持った学生は 60 名（73.2%）2 人の患者を受け持った学生は 20 名（24.4%）で、3 人の患者を受け持った学生は 2 人（2.4%）であった（図 6）。

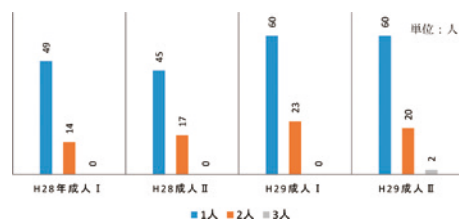


図 6 実習期間中に一人の学生が受け持った患者数

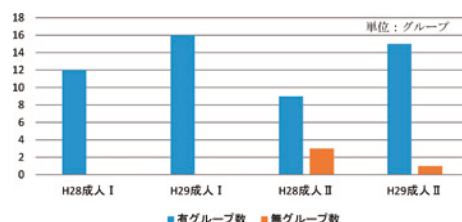


図 7 実習グループ内 70 歳未満の患者の有無

#### 6. 実習グループ内で 70 歳未満の患者を受け持っていた学生の有無

1) 平成 28 年度成人看護学実習 I では、70 歳未満の患者が含まれていた実習グループは、12 グループ中 12 グループであった。

2) 平成 29 年度成人看護学実習 I では、70 歳未満の患者が含まれていた実習グループは、16 グループ中 16 グループであった。

3) 平成 28 年度成人看護学実習 II では 70 歳未満の患者が含まれていた実習グループは、12 グループ中 9 グループで、3 グループには含まれていなかった。

4) 平成 29 年度成人看護学実習 II では 70 歳未満の患者が含まれていた実習グループは、16 グループ中 15 グループで、1 グループには含まれていなかった（図 7）。

## V. 考 察

平成28年度と平成29年度の成人看護学実習において、70歳未満の患者を受け持った学生は半数以下であり、福岡(2015)の研究においても対象者の年代は70歳代が最も多く、約7割の学生が高齢期の患者を受け持っているということから、本研究結果と概ね同様の結果であった。2017年1月、日本老年学会、日本老年医学会の連名による「高齢者に関する定義」についての提言が行われ、65歳～74歳を准高齢者、75歳～89歳を高齢者、90歳以上を超高齢者としている。現在の高齢者においては10～20年前と比較して加齢に伴う身体的機能変化の出現が5～10年遅延しており、「若返り」現象がみられていること、従来、高齢者とされてきた65歳以上の人でも、特に65～74歳の前期高齢者においては、心身の健康が保たれており、活発な社会活動が可能な人が大多数を占めていることがその理由として述べられている。成人看護学では、成人期を大きく3つに大別している。青年期を15歳～30歳、壮年期を30歳～60歳、向老期を60歳～65歳としている。一般的には、成人看護学の対象年齢は15歳～64歳までであるが、本研究では、患者の年齢を10歳代区分で調査しており、65歳未満というデータは取れなかったが、70歳未満としても大きな違いはないと考える。

成人看護学実習において学生が受け持った患者の主病名の結果は、循環器系の疾患、筋骨格系の疾患、悪性新生物については、近年の傷病分類別受療率の上位の疾患とほぼ同様であり、脳神経系の疾患に関しては生活習慣病が基礎疾患となることから、現在の医療状

況を反映していると考えられる。

成人看護学実習Ⅰでは、周手術期にある患者を受け持ち、看護過程を展開することを目標にしている。その中で、5～6割の学生が手術の見学を体験することができていた。手術の見学は、患者が受ける生体侵襲の理解や手術前後の援助の必要性が深まるなどの意義があり、今後も見学の目的を踏まえて可能な限り調整をしていくことが必要である。

厚生労働省(平成23年)は看護師教育の現状と課題の中で、在院日数の短縮化により学生が実習期間を通して一人の患者を受け持つことが難しく、また、患者層の変化や患者権利擁護により、従来の対象別・場所別の枠組みでの実習を行うことが困難となってきたこと、目的に合った学習体験の機会が確保できにくくなってきているとしている。今回の調査では、7割以上の学生が3週間継続して一人の患者を受け持ち、看護過程を展開していた。今後もさらに入院期間の短縮が加速され、複数の患者を受け持つ可能性が高く、実習前・中・後のカンファレンスや自己・他者評価や個人面談、レポート作成などの内省的考察により学習効果が高められるように、これまで以上の取り組みが必要と考えられる。

今回の調査では、ほとんどのグループ内に70歳未満の受け持ち患者が含まれていた結果であった。成人期の患者を受け持つことができない場合でも、できるだけ成人に近い年齢の患者を選定するようにし、グループ内に少なくとも1名は成人期の患者が受け持てるように調整していくことが必要である。同様に成人看護学実習Ⅰにおいても少なくとも1



人は周手術期にある患者を受け持てるように調整していく。このことは実際に成人期の患者を受け持ち実習できる学生が少ない中、実習グループ内に1人でも成人期にある患者がいればその異なる点を比較させながら、カンファレンス等でグループ内での学びの貴重な機会となるからである。実際に、教員は患者の年齢にかかわらず職業のある患者や、家庭

での役割、社会的活動などを意識させながら実習を展開しているのが現状である。今後も生産年齢人口が減少することが容易に推測される中、65歳以上の職業人が増加することが予測されることから、看護過程の展開には、加齢に伴う変化に加えて、個別性を強く意識させる必要があり、患者年齢のみにとらわれずに指導をしていく必要がある。

## VI. 研究の限界

今回の研究では、2年間の成人看護学実習における看護対象について実態をまとめた。受け持ち患者は70歳代が多く、他の研究と概ね同様であった。しかし、患者年齢のデータが年代のため成人期の年齢を具体的実数で

示すことはできなかった。また、学生の目的達成度や実習に対する評価、担当教員の指導に対する差異については調査・検討はしていない。今後はこれらについても検討していく必要がある。

## VII. 結

## 語

1) 70歳未満の患者を受け持った学生は、成人看護学実習Ⅰでは約半数であり、成人看護学実習Ⅱでは約2～3割であった。

2) 受け持ち患者の主な疾患は、成人看護学実習Ⅰでは悪性新生物、筋・骨格系、脳神経系が2年間とも上位を占め、成人看護学実習Ⅱでは循環器系、脳神経系、悪性新生物が2年間とも上位を占めていた。

3) 成人看護学実習Ⅰにおいて、手術の見

学を体験できた学生は約6割であった。

4) 3週間の実習期間中に複数患者を受け持った学生は、成人看護学実習Ⅰ、成人看護学実習Ⅱともに約2～3割であった。

5) 70歳未満の患者が含まれていた実習グループは、成人看護学実習Ⅰでは全グループに含まれ、成人看護学実習Ⅱでは約8割に含まれていた。

## 参 考 文 献

- 1) 厚生労働省（2011）：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書平成23年2月28日

- <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf> (平成29年10月11日検索).
- 2) 日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分会 (2017): 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準看護学分野平成29年9月29日. 総務省統計局ホームページ: <http://www.stat.go.jp/data/nihon/02.htm>.
  - 3) 文部科学省: 臨地実習指導体制と新卒者の支援 (2012): [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm) (平成30年1月11日検索).
  - 4) 統計局ホームページ / 平成27年国勢調査 人口等基本集計結果 平成28年10月26日要約及び概要 (第1部) [www.stat.go.jp/data/kokusei/2015](http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015) (平成30年1月10日検索).
  - 5) 日本老年医学会: 高齢者に関する定義検討ワーキンググループ 報告書 平成29年8月1日 [https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/info/topics/20170410\\_01](https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/info/topics/20170410_01) (平成30年1月10日検索).
  - 6) 福岡珠美: 成人看護学実践実習における看護対象の実態. 太成学院大学紀要、18: 89-97, 2015.
  - 7) 原田秀子他: 成人看護実習における看護実践能力の育成に関する研究—成人看護学実習前の効果的な学内演習プログラムの作成. 山口県立大学学術情報第2号看護栄養学部紀要、2009.
  - 8) 野口秀子他: 成人急性期看護実習生の実習前技術演習における術後管理技術の習得とその実践についての研究. 日本看護学教育学会、5.1: 69-77, 2015.
  - 9) 柘野浩子他: 成人看護実習Bにおける学生の学びに関する研究—実習総括記録からの検討—. 新見公立大学紀要、33: 29-36, 2012.
  - 10) 渡辺陽子他: 学生による成人看護実習指導の評価—1回生と2回生の比較検討—. 四大学看護学研究会雑誌、3: 13-19, 1981.
  - 11) 中澤洋子他: 成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究—不安 看護過程展開 コンピテンシーを中心に—. 北海道文教大学研究紀要、36: 127-136, 2021.
  - 12) 西谷千恵他: 成人看護学急性期実習の現状と課題. 中京学院大学看護学部紀要4: 39-50, 2014.